

◆◇4月28日ー労働安全衛生世界デー◇◆

◆◇(World Day for Safety and Health at Work)◇◆

労働災害や職業病は、毎年世界全体で220万人余り(1日平均5,000人)の生命を奪っていると推計されます。この他に、死亡に至らなかった重傷者は約2億7,000万人、業務関連疾病の罹患者は1億6,000万人に達しているとされます。日本でも下降傾向にありながらも毎年1,500人近くの方々が労働災害を原因として亡くなっています。ILOではこのような事故や健康障害の総経費は政府の対途上国援助額(ODA)全体の20倍を超え、国内総生産(GDP)世界合計の4%近くに達していると推計しています。

このように多大な苦しみと損失を引き起こし、高い経費となるにもかかわらず、職業上の安全と健康がその重要性に値する注目を集めることはなかなかありません。適切な予防措置が講じられていれば、ほとんどの事故は予防可能であるとILOでは考えています。労働安全衛生に関するILOの条約、勧告、実務規程に導かれ、適切な申告・監督慣行に支えられた健全な予防措置を個々の企業及び国家レベルで体系的に実施していく必要があります。そこでILOでは2003年に、労働安全衛生面の向上を長期的目標

に、予防的安全衛生文化の大切さを人々に知らせ、この文化を育む啓発活動の一環として、4月28日を労働安全衛生世界デーと定め、加盟国政労使と協力して、安全で健康的な仕事、そして適切で人間らしい働き方であるデーセント・ワークの利点に人々の注意を喚起する日としました。日本でも既に同種のものとして7月の全国安全週間や10月の全国労働衛生週間などがあります。



\*4月28日の歴史

4月28日は元々1914年にカナダで包括的な労働者災害補償法が成立した日です。1984年にカナダの公務員労組

(CUPE)はこの日を「労働者の追悼の日」とすることに決め、カナダ労組会議(CLC)もこれを受け入れ、後に政府もこの日を正式の記念日と定める法を成立させました。

1989年から米国、英国、アジア、ヨーロッパ、アフリカといった各地の労働組合もこの日を死傷した労働者を悼む日とするなど、この日は次第に国際化していきました。1996年にはニューヨークで開かれていた国連の持続可能な開発委員会の場で労働組合が特別の式典を開催し、持続可能でない生産形態のために死傷したり疾病に罹患した労働者の数を、ろうそくを灯して強調しました。同年、国際自由労連(ICFTU、現国際労働組合総連合(ITUC))がこの日を、死傷労働者を追悼する国際デーとすることに公式に定めたことによってこれは世界規模の運動となり、持続可能な労働と職場の概念が組み込まれるなど、対象範囲も広がりました。

2001年からILOもICFTU及び各地の労働組合と共にこの日を記念する活動に加わるようになりました。そして、2003年に「労働安全衛生世界デー」と名称を変更し、労働災害及び職業病の予防に焦点を当て、職場における予防的安全衛生文化を形成し、持続させる方法の推進に乗り出しました。同年6月に開かれた第91回ILO総会で採択された労働安全衛生世界戦略でも、労働安全衛生の重要性について幅広く啓発を図り、安全で健康的な職場環境を享受する労働者の権利を促進することに向けたこのような国際的な年次イベントまたはキャンペーンの必要性が認められています。発祥国のカナダの他に、アルゼンチン、ベルギー、ブラジル、ルクセンブルク、ポルトガル、スペインなど既に12カ国以上がこの日を正式に国内的な記念日とし、毎年、100カ国以上でこの日に合わせた行事が行われています。

\*過去の行事

ILOでは毎年、世界デーのテーマを決め、それぞれのテーマに関連した報告書を発表し、集中的な広報活動を展開しています。過去のテーマは次のようになっています。

- ・2003年: グローバル化する世界の中での安全衛生文化
  - ・2004年: 安全文化の形成と維持
- サブテーマ: 危険有害物質、職場内暴力、職業性呼吸器疾患
- ・2005年: 予防的安全衛生文化の形成と維持
- サブテーマ: 建設業、高齢者・若年者の労働安全衛生
- ・2006年: ディーセント・ワークー安全な仕事ーHIV/エイズ

ILO駐日事務所でも2003年からこの日を記念し、国内でフォーラムを開催しています。2004年からは日本労働組合総連合会(連合)の協力を得て、連合による世界デー報告書の日本語版をILO駐日事務所のウェブサイトに掲載しています。

#### \*2007年の労働安全衛生世界デー

今年の世界デーのテーマは「安全で健康的な職場: ディーセント・ワークを現実のものに」として、ILOの推進するディーセント・ワーク課題の達成にとって必要不可欠な安全で健康的な職場環境の重要性に焦点を当てています。今年の報告書はディーセント・ワーク課題の四つの構成要素(国際労働基準並びに働く上での基本的な原則及び権利、ディーセントな雇用、すべての人への社会的保護、政労使の三者構成主義と社会対話)を通じて労働安全衛生の大切さを説いたものとなっています。

ILO駐日事務所では4月27日に、「グローバル化と労働安全衛生の課題: ILO新条約(第187号)が日本とアジアの職場環境改善にもたらす意味」と題し、日本及びアジアの職場環境改善例の紹介なども交えながら、2006年に採択され、日本でも批准に向けた検討が進んでいる職業上の安全及び健康促進枠組条約(第187号)及び付属する同勧告(第197号)の観点から安全で健康的な職場環境の達成に向けて話し合いを行いました。

以下に4月28日に合わせて発表されたILOの日本人専門家による安全で健康的な職場の達成に向けた提案を掲載します。

#### \*より安全で健康的な職場環境に向けて一簡単に実践できる10箇条

ILO東アジア準地域事務所  
川上剛労働安全衛生上級専門家

従業員または管理職として、もしくは自分の会社の経営者または無給で家事を行う人として。その形態にかかわらず、ほとんどの人は働いており、したがって、4月28日の労働安全衛生世界デーは、私たち皆が生活の質と健康を改善する方法について考える重要な時間と貴重な機会を与えるものとなります。

毎年、業務関連の事故及び疾病で、世界全体で約220万人の方々が亡くなると推計されています。この他に業務に関連して、毎年、2億7,000万人が重傷を負い、1億6,000万人が短期または長期の疾病に罹患すると推計されています。

そこで、より安全で健康的な職場環境の経済的、人的、社会的利益は明らかです。さらにまた、より安全な職場は、生産コストの引き下げ、より良い雰囲気、事故及び負傷の発生件数の低下につながるより生産的な職場であることを示す証拠も多くあります。そして、通常の工場や事務所を、より安全で健康的なより良い職場にする基本的な原則は小規模の企業や自宅、アパートにも同じように適用できます。

職業上の安全は費用効果があるだけでなく、安価で簡単に実行できるものでもあります。ここに皆さんの職場をより安全で健康的なものにするために簡単に実行できる10の方法をご紹介します。

1.安全は皆に関係します。何か誤りに気づいたら他の人がどうにかすると考えてはいけません。同僚同士、労使間の定期的な話し合いは安全性を高める上でのカギとなります。情報、アイデア、気になっていることを交換する仕組みを構築し、定期的な点検スケジュールを決めましょう。小さな日々の改善が安全で生産的な職場環境のカギなのです。

- 2.スペースをうまく使いましょう。作業域、休息用の場所、あるいは保管用のスペースを混合しないようにしましょう。通路と作業スペースは整頓し、適度な照明を確保しましょう。きれいな飲み水や清潔な衛生設備がすぐに利用できる状態にしておきましょう。
- 3.定期的に数分間を作業域の点検に使う習慣を付けましょう(携帯電話のアラームが便利)。腰を曲げたり、ひねったり、腕を上げる動作を最小限に留めるため、自然な姿勢で肘の高さが理想的な作業位置です。よく使う物はすぐ届く範囲内に置いておくのがよいでしょう。
- 4.危険な可動部のある機械には防護装置が備えられており、電気の接続や配線が安全であるよう確保すべきです。工場だけでなく自宅にある機械でも簡単に怪我をしたり、時には生命に危険が及ぶ場合があります。機械装置は定期的に保守・点検し、破損部やぐらぐらしている部分がないか少なくとも1か月に1回は点検しましょう。
- 5.環境について考えましょう。粉塵、化学物質、騒音、熱といった危険にさらされるのは工場の仕事だけでなく、オフィスや自宅でも同じです。自然換気を最大限に行い、化学物質は正しいラベルを付けて安全な場所に保管しましょう。温度は快適に保ち、高温や低温の問題が常に見られるならば断熱を考えましょう。
- 6.保護眼鏡、保護靴、手袋、ヘルメットなど適切な衣服と保護装置を確保しましょう。救急セット、そしてその使い方についての訓練は重要です。
- 7.重い物や持ちにくい物を持ち上げたり動かしたりする時や定期的な作業を行う際には(十分に保守された)省力機材を用いましょう。
- 8.あなた自身または従業員の仕事に多様性を持たせましょう。単調と飽きは品質と生産性のみならず安全性の敵でもあります。仕事をもっとおもしろくすることは新しい技能の開発にも役立ちます。
- 9.同僚の中には能力を十分発揮するのに特別のケアを必要とする方々がいるかもしれません。妊娠中の女性や障害のある方々、外国人労働者や高齢者のニーズに配慮しましょう。
- 10.最後に、休憩を取ることを忘れないようにしましょう。短い休憩を定期的にとることは生産性と仕事の質を高く保ち、事故のレベルを低く維持する助けになります。長期的には、定期的に休みを取ることを贅沢と考えてはなりません。これは燃え尽き状態や疲労、過労を予防する助けになるのです。

今年の世界デーのテーマは「安全で健康的な職場—ディーセント・ワークを現実のものに」です。ILOの活動課題の中心にあるディーセント・ワークとは本質的に、十分に仕事があることが重要なだけでなく、仕事の質もまた問題であるとの事実を注意を喚起するものです。安全と健康が質の高い仕事、ディーセント・ワークの基本的な部分であることは容易に理解できることでしょう。そこで、今日1日だけでなく、1年365日続く安全文化を形成することは私たちすべての利益にかなうのです。